
魔法少女リリカルなのは StrikerS a treacherous act

グロリオサ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは Strikers a treach
erous act

【Zコード】

N3561M

【作者名】

グロリオサ

【あらすじ】

・・・・・全ての悲劇は10年前に始まった。

機動六課に配属された1人の馬鹿で真直ぐに見える青年が心の闇を隠しながら生き、どうなるか・・・・・

これは魔法少女リリカルなのは Strikers再構成小説です、初めての投稿になりますので長い目で見てくれるとうれしいです。

ハッピーハンドにできるかな〜?

プロローグ（前書き）

初っ端からダークです次からはしばらくないと私は苦手な人はパソコン、ケータイの電源を切ってください（笑）

プロローグ

・・・・・ 力が欲しいと思つた。

力が有れば

「グッ・・・・アツアアア～～～！」

目の前で胸を貫かれ苦しんでいる父さんを助けることができたのに

ドサツー！といつ音と共に父さんが倒れた。

「父さん！」

僕は直ぐに倒れた父さんに近づき息をしているか確認し、荒いながらも呼吸をしている事に安心したが、そのまま父さんをこんなにした二人を睨み付けた。

「・・・・・すまない」

片方の女が小さくそう言った。

「・・・・・ツ行ぐぞ！」

もう片方の女はそう言つて二人とも飛んで行つた。

・・・・・ 力が欲しいと思つた。

・・・・・力が欲しいと思つた。

力が有ればこんなことにならなかつたのに

「「めんね、「めんね、「めんね、「めんね、「めんね」

まるで呪詛のように同じ言葉を何度も呟きながらゆつくりと僕の首を絞める母さんがいた。

「「めんね、「めんね、「めんね、「めんね、「めんね」

母さんの後ろにまだ血を流して死んでいる父さんがいた。

「「めんね、「めんね、「めんね、「めんね、「めんね」

首を絞める力が更に強くなつた。

「「めんね、「めんね、「めんね、「めんね、「めんね」

ビッチャ！

・・・・・力が欲しいと思つた。

プロローグ（後書き）

初めましてグロリオサと申します。

初めての投稿となりますので長く生暖かい目で見て貰えるとうれしいです。

・・・・新規は遅いかも知れませんが

第1話「試験なんざ男ならぶつつけ本番でいいんだよ！2人ほど女だけど細かい

絶望した！自分の文才の無さに絶望した！

絶望した！時間がかかり過ぎたことに絶望した！

こんな駄文でも読んでると幸いです。

第1話「試験なんざ男ならぶつけ本番でいいんだよ！2人ほど女だけど細かい

新暦75年 4月 ミッドチルダ臨海第8空港近隣 廃棄都市街

その廃棄都市街にある一つの廃ビル屋上に3人の人影があつた。

「ふつうーつはあ！」

1人はローラシューズを履き、右手にナックル型のデバイスを付け元気良くシャドーボクシングをしている青い髪の少女。

「スバル、あんまり暴れてると試験中にそのオンボロローラーいつちやうわよ。」

その後ろで銃の形をしたデバイスを弄るオレンジの髪の少女。

「え～！？ティア～嫌なこと言わないで～！」

その少女2人を見るように廃ビル屋上の壁にもたれ少し変わった槍型のデバイスを持つ黒いサングラスを付けた黒髪の少年。

・・・まあ、何が変わっているかと言うと彼のデバイスは形こそ見れば槍なのだが刃の部分が30cm程ある円錐形のドリルで反対にある石突の部分は妙に膨らんでいた。

「つとーそろそろ時間ね、ツルギ～あんた準備はいいの～？」

ティアの呼ばれた少女が右手に出した小さなモニターで現在の時刻を確認しながら壁にもたれる少年に確認をとる。

「…………」

・・・・寝てやがる。

ティアと呼ばれた少女は頭に手をあてて顔を引きつかせ

「・・・ふん！」

「グボツウ！」

「ちよ！ティア！」

少年の鳩尾を蹴った・・・・・後ろ回し蹴りで。

「・・・・・ティ・・・・・ティアナ・・・・・てめ・・・・」

「試験直前になつても寝る馬鹿を起こしてあげたんだから感謝しなさい！！」

ツルギと呼ばれた少年は鳩尾を抑えながら抗議の言葉を吐くがバッサリと切られ、そんな2人のやり取りをスバルは「あははは」と小さく笑うことしかできなかつた。

ジー！という音と共に3人の前方上空に腰に手をあてた銀色の髪をした少女が映つたモニターが現れた。

「「！」

スバルとティアナは直ぐにモニターに向かうが約1名未だに腹部を押さえ苦しんでいる・・・・・つーか今すぐにでも口から吐しゃ物を出しそうな顔である。

『おはようござります！ さて、魔導師試験の受験者さん3名、揃つてますか～・・・・・って後ろの黒髪の魔道師さん！ 大丈夫ですか！？』

銀髪の少女の声にツルギは親指を立てゆつくりと前を向くと

「おえつ！」

・・・・・・・・吐きやがった。

しざりくお待ちください

先ほどツルギが吐いてから銀髪の少女はモニター越しに「あわわわ、お医者さん、お医者さん」と咳きながらあたふたしだし、それをティアナが「大丈夫ですから！ 大丈夫ですから！」と答えスバルが水を汲みツルギがそれを飲み、3人が「すいません、お騒がせしました」と謝り、ようやく事態が収拾した。

ちなみにティアナは後ろ回し蹴りはやり過ぎたと思い、ツルギに小さい声で「ごめんやり過ぎた。」と謝ったがそれに対してもツルギは、「ティアナが謝った・・・・明日は雪か・・・・」などと言った為、今度は脛を蹴られた。

『えっと・・・そ、それでは気を取り直して』

銀髪の少女は一度コホンと咳き込み、手に持ったバインダーに視線を移す。

『確認しますね。時空管理局陸士386部隊所属の、スバル＝ナカジマ＝等陸士』

「はい！」

『とティアナ＝ランスター＝等陸士』

「はい！」

『最後にツルギ＝ヤクモ＝等陸士』

「ひつすー！」

『所有している魔導師ランクは陸戦Jランク、本日受験するのは、陸戦魔導師Bランクへの昇格試験で間違いないですね？』

「はい！」

「間違いありません！」

「問題ねーす！」

確認が済むと少女はバインダーから目を離し、3人に向き合つ。

『本田の試験官を努めますのは、私、リインフォース？（ツヴァイ）空曹長です。』

『よろしくですよ～』リインフォースと名乗つた少女が敬礼をし、3人はそれに「よろしくお願ひします！」と敬礼を返した。

『3人はここからスタートして、各所に設置されたポイントターゲットを破壊、ああ！勿論破壊しちゃ駄目なダミーターゲットもありますからね？』

3人の目の前にモニターが次々と現れ、コース説明、破壊するターゲット、破壊してはいけないダミーターゲットをリインフォースから説明を受ける。

『妨害攻撃に気をつけて、すべてのターゲットを破壊、制限時間内にゴールを目指してくださいです。何か質問は～？』

リインフォースと問いかけにスバルは困ったようにティアナとツルギを見る。
するとツルギが手を挙げた。

『はい！ヤクモー等陸士ビヅゼーです！』

「ダミーターゲットを破壊した場合どうなるんすか？」

『それは勿論減点ですよ！他に質問はありますか～？』

ツルギの問いにリインフォースは腰に手をあて少し膨れたようにいつ。

ティアナが横で「何当たり前のこと聞いてんの？」とやや呆れ口調で言うが気にしないでさらに続ける。

「え～と、最後の質問つす、リインフォース？空曹長はあのハ神二等陸佐の融合騎で間違いないですか？」

『はい！間違いないですよ～、ヤクモ二等陸士は、はやてひや・・・ハ神二等陸佐のことを「存じなのですか～？」』

「・・・ええまあ」と曖昧な返事をするツルギを見てスバルが少し悪戯つ子のような笑みを浮かべた。

「ツルギはハ神二等陸佐のファンだもんね～」

「な～～」

スバルの答えにツルギは顔を少し赤らめて横を向き、リインフォースは『そ～なんですか～』と嬉しそうに笑みを浮かべる。

「あ、あの～、試験管、試験の方は？」

『おおっと、話が横道に逸れたですね。他に試験についての質問はありますか～？』

ティアナの言葉にリインフォースは試験の話に戻った。

「ありません」

「ありません」

ティアナとスバルの返答にリインフォースは満足そうに頷き、ティアナの横で顔を背けながら「もうねーす」と恥ずかしげを見て小さく笑った。

『それじゃあ、スタートまであと少し、ゴール地点で会いましょう』

う、ですよ

リインフォースがそう言つて軽くウイーンクするとモーターが消え、変わりに青い三つのカウントダウンライトが現れた。

「「「ー.」」」

青色のライトが2つに減り色が黄色に変わり、3人は体を直ぐに走れる体制にしていく。

ライトが1つになり色が赤になるとティアナが口を開いた。

「レディー」

ライトが全て消えスタートの文字が映し出される。

「「ゴーー.」」

「よつしゃーーー行くぜー行くぜー行くぜー」

「ツルギ！ うるさい！！」

3人は一斉に走り出した。

ガン！

ティアナが隣のビル壁にアンカーを打ち込みスバルはティアナの腰に掴まってワイヤーを使いビルから飛び降りる。

ツルギは檜を垂直に構えると石突の部分から灰色の光が噴き出し、ツルギはそれを推進力に使いゆっくりとティアナ達の後を追つた。

「中のターゲットはあたしが潰してくるー。」

「手早くね！ツルギあんたも中の方お願ひ！」

「了解！」

スバルがビルの窓ガラスを割りながら中に入るとその直ぐ後にツルギも中に入つていつた。

「はああ！」

「一ノ山野村！」

スバルが勢い良くターゲットを破壊していく後ろでツルギも槍を

振り回しながら破壊していく。

「よつし！」の階終わり次・・・下う！・

ツルギは自分達のいる階のターゲットを破壊し終わるとドリルを地面に向けてそのまま床を打ち貫く。

「よっしゃ！ 行くぞ、スバル！」

「ちょ！ ツルギ！」

床に空けた穴を使い下の階に降りて行くツルギを見て「これ良いのかなー?」と呟きながらもスバルは後を追う。

とするツルギをスバルが襟首を捕まえて引きずりながら出口に連れて行きティアナと合流した。

「あんた！馬鹿じゃないのーー！そんな事して老朽化したビルが崩れでもしたらいじりすんのよーー！」

「あ～もう！悪かつたつて！次からは気を付ける！」

スバルが先ほどの事をティアナに報告をすると走りながらツルギを怒鳴り始めた。

「あんたは良いけど！スバルやダミーターゲットまで埋つたらどう

う責任取るの！――

「酷！ティアナ酷すぎー俺如何なつても良いのー？」

「うつさい！黙れ！――」

悪いの俺だけじ、まじ酷過ぎね。

ツルギは心中だけで涙ぐんだ。

3人は順調にターゲットを破壊しながら進んでいたが、一本道に大量のターゲットが待ち構えていた。

「うわー多い！ティア、ツルギどうする？」

「男なら正面突破！――」

「却下！後、私たちは女！・・・・・・見たところダミーターゲットは無いみたいだから焦らず確実に潰していくわよ。」

ティアナの言葉にスバルは頷くがツルギは正面突破が却下されたことに不服なのが黙つていたが不意にニヤリと笑みを浮かべた。

「なあティアナ、ダミーターゲットは無いんだよな？」

「一応、見た所はね。」

絶対余計」とを考えている！

「よつしゃーじゃあ俺が一気に数減らしてやる……」

ツルギは自信満々に言い放つと槍をターゲットに向けて魔力を集中しました。

「ちょ！ツルギ何すんの！」

「良いから見てなつて……」

ツルギの足元に魔法陣が展開されると同時に槍の先端に半径10cm程の魔力の球ができる。

「ショット・ガン！！」

ツルギの言葉と共に魔力の球は無数に弾け、弾幕はターゲット群を呑み込むように破壊していった。

「すつ”ーい

その光景にスバルは素直に感想を述べるがティアナは銃を構え、煙がゆっくりと晴れると残ったターゲットを幾つか打ち貫いた。

「面白い技だけど・・・かなり撃ち漏らしがあるわね。」

「つせー数減らすだけって言つたろ！」

「ほらー！ティア、ツルギ、ケンカしないで速く行こうよ～

3人は残ったターゲットを破壊する為にまた走り出した。

「なるほど、これはハヤテの言つとおり伸びしろがありそうだね。

」

金髪の女性、フェイト＝テスター・ロッサ＝ハラウンはモニターに映る3人の受験者がターゲット次々破壊していくのが映し出されていた。

「そやろー、3人ともチームワーク良いし鍛えたらもっと良くなるで。」

ハヤテと呼ばれた薄い茶髪の女性、八神＝ハヤテは楽しそうにモニターを見続ける。

「」のまま最終関門突破できるかな?」

「どうやるな?最終の大型スフィアは今の3人の実力では真正面からはちょっときついな」

「・・・うん、今の3人じゃ防御も回避も難しい中距離自動攻撃型の砲撃スフィアだね。」

「ああ！それを如何やつて切り抜けるか、知恵と勇気の見せ所や、頑張りや3人とも。」

フエイトとハヤテは楽しそうにモニターを見続けた。

第1話「試験なんざ男ならぶつつけ本番でいいんだよ！2人ほど女だけど細かい

第1話から主人公が暴走し始めてる・・・

こんな駄文を読んで下さつてありがとうございますーー！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3561m/>

魔法少女リリカルなのは StrikerS a treacherous act

2010年10月10日18時18分発行